

第3講

藩の存続を賭けて石を積み！ —江戸時代初期の城普請とその影響— (2011年度第3問)

17世紀前半、江戸幕府は各藩に、江戸城や大坂城等の普請を命じた。そのことに関する次の(1)～(4)の文章を読んで、下記の設問A・Bに答えなさい。

- (1) 城普請においては、それぞれの藩に、石垣や堀の普請が割り当てられた。その担当する面積は、各藩の領知高をもとにして決められた。
- (2) 相次ぐ城普請は重い負担となったが、大名は、城普請役をつとめることが藩の存続にとって不可欠であることを強調して家臣を普請に動員し、その知行高に応じて普請の費用を徴収した。
- (3) 城普請の中心は石垣普請であった。巨大な石が遠隔地で切り出され、陸上と水上を運搬され、緻密な計算に基づいて積み上げられた。これには、石積みの専門家穴太（あのを）衆に加え、多様な技術を持つ人々が動員された。
- (4) 城普請に参加したある藩の家臣が、山から切り出した巨石を、川の水流をたくみに調節しながら浜辺まで運んだ。これを見て、他藩の者たちも、皆この技術を取り入れた。この家臣は、藩内各所の治水等にも成果をあげていた。

設問

- A 幕府が藩に課した城普請役は、将軍と大名の関係、および大名と家臣の関係に結果としてどのような影響を与えたか。負担の基準にもふれながら、3行（90字）以内で述べなさい。
- B 城普請は、17世紀の全国的な経済発展に、どのような効果をもたらしたか。2行（60字）以内で述べなさい。

解いてみましょう（第3講）Aについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア について書く。

イ の関係に与えた影響について書く。

ウ の関係に与えた影響について書く。

エ に触れながら書く。

オ 3行（90字）以内で書く。

2 資料の内容と教科書（プリント）の記述を照らしあわせる。

(1) 城普請に関する の関係についての教科書の記述は

教科書の



(2) の関係についての教科書の記述は

教科書の



(3) 当時（17世紀前半）の社会情勢についての教科書の記述は

教科書の



次のページに「東大チャート」があります。上記の「問われている（求められている）ことを確認する」と「関連する教科書のページと内容」の抜粋及び、参考となる教科書の【鎌倉時代】の記述が記されています。

東大チャート「江戸時代の城普請が大名・家臣に与えた影響」(2011年度第3問設問A)

()へは、ほぼ抜き出して入れる。)へは、考えて「決めぜりふ」を入れる。

【教科書の記述】

(家康は) 1614~15(慶長 19~元和元)年、大坂の役(大坂冬の陣・夏の陣)で豊臣方に戦いをしかけ、攻め滅ぼした。(P. 170~171)

(1) 城普請においては、それぞれの藩に、石垣や堀の普請が割り当てられた。その担当する面積は、各藩の領知高をもとにして決められた。

【教科書の記述】

さらに(家光は) 1634(寛永 11)年、将軍の代がわりにあたり、30万余りの軍勢をひきいて上洛した。これは、統一した軍役を全大名に賦課し、軍事指揮権を示したものである。大名は石高に応じて一定数の兵馬を常備し、戦時には将軍の命令で出陣し、平時には江戸城などの修築や河川の工事などの普請役を負担した。(P. 171)

(2) 相次ぐ城普請は重い負担となったが、大名は、城普請役をつとめることが藩の存続にとって不可欠であることを強調して家臣を普請に動員し、その知行高に応じて普請の費用を徴収した。

【教科書の記述(鎌倉時代)】

幕府支配の根本となったのは、将軍と御家人との主従関係である。頼朝は主人として御家人に対し、おもに地頭に任命することによって先祖伝来の所領の支配を保障したり(本領安堵)、新たな所領を与えたりした(新恩給与)。この御恩に対して御家人は、戦時には軍役を、平時には京都大番役や幕府御所を警護する鎌倉番役などをつとめて、従者として奉公した。(P. 98)

城普請役は、①後、
②から③に対する
④に代わる⑤な
⑥となり、⑦に
 応じて⑧された。
③は、⑨を動員する
 とともに、その⑩に応じて、
 普請の⑪。
 こうして、それぞれの間で⑫
 が⑬された。

【教科書の記述】

大名は、初期には領内の有力武士に領地を与え、その領民支配を認める地方知行制をとる場合もあったが、しだいに(略)藩の直轄領(蔵入地)からの年貢を蔵米として支給する俸禄制度がとられるようになった。こうして大名の領地・領民を支配する力は強化され、藩の職制も整備されて藩権力は確立していった。(P. 173~174)

抜き出したものをまとめる

城普請役は ① 後、② から ③
に対する ④ に代わる ⑤ な ⑥ となり、
⑦ に応じて ⑧ された。
③ は、⑨ を動員するとともに、その ⑩ に
応じて、普請の ⑪。
こうして、それぞれの間で、⑫ が ⑬ された。



4 90字に要約する。

解いてみましょう (第3講) Bについて

1 問われている (求められている) ことを確認する。

ア

について書く。

イ 2行 (60字) 以内で書く。

2 資料 (3) (4) の内容と教科書 (プリント) の記述を照らしあわせる。

教科書の



Blank box for writing the answer to question 1a.

教科書の



Blank box for writing the answer to question 1b.

教科書の



Blank box for writing the answer to question 2.

次のページに「東大チャート」があります。上記の「問われている (求められている) ことを確認する」と「関連する教科書のページと内容」の抜粋も記されています。

東大チャート「江戸時代の城普請が経済発展にもたらした効果」(2011年度第3問設問B)

(へ、ほぼ抜き出して入れる。※すべて抜き出せば埋めることができます。)

(3) 城普請の中心は石垣普請であった。巨大な石が遠隔地で切り出され、陸上と水上を運搬され、緻密な計算に基づいて積み上げられた。これには、石積みの専門家穴太(あとう)衆に加え、多様な技術を持つ人々が動員された。

【教科書の記述】
 鉱山で使われた鉄製のたがね・のみ・槌などの道具や、掘削・測量・排水などの技術は、治水や溜池・用水路の開削技術に転用された。その結果、河川敷や海岸部の大規模な耕地化が可能となり、農業・手工業生産の発展に大きく貢献した。(P. 174~175)

【教科書の記述】
 新田開発や技術の革新により石高は大幅に増加し、田畑面積は江戸時代初めの164万町歩から、18世紀初めには297万町歩へと激増し(1町歩は約1ha)、幕府や大名の年貢収入も大きく増えた。(P. 203)

(4) 城普請に参加したある藩の家臣が、山から切り出した巨石を、川の水流通をたくみに調節しながら浜辺まで運んだ。これを見て、他藩の者たちも、皆この技術を取り入れた。この家臣は、藩内各所の治水等にも成果をあげていた。

鉱山で用いられた鉄製の ① や掘削・測量・排水などの ② が、 ③ や溜池・ ④ の開削技術に ⑤ されて ⑥ が行われて ⑦ が拡大した。 ⑧ ・ ⑨ の ⑩ が整備され ⑪ の ⑫ が発達した。

【教科書の記述】
 大量の物資を安価に運ぶためには、陸路よりは海や川、湖沼の水上交通が適していた。まず、17世紀の初めから内水面の河川舟運が整備された。(略) また河岸と呼ばれる港町が、陸上交通と舟運とを結ぶ流通の拠点として各地につくられた。(略) 海上では17世紀前半に、菱垣廻船などが、大型の帆船を用いて、大坂から江戸へ多様な商品を運送し始めた。17世紀後半になると、江戸の商人河村瑞賢が、出羽酒田を起点とし江戸に至る東廻り海運・西廻り海運のルートを整備し、江戸と大坂を中心とする全国規模の海上交通網を完成させた。(P. 207~208)

抜き出したものをまとめる

鉱山で用いられた鉄製の ① や掘削・測量・排水などの ② が
③ や溜池・ ④ の開削技術に ⑤ されて
⑥ が行われて ⑦ が拡大した。
⑧ ・ ⑨ の ⑩ が整備され ⑪ の
⑫ が発達した。



4 60字に要約する。

Empty rectangular box for summarization.

< エピソード 「御手伝普請と島原の乱」 >

御手伝普請は、江戸城下町建設のために、役高 1000 石につき 1 人の人足を徴発したことに始まる。その後、江戸城や駿府城、名古屋城などの築城が続き、大名が普請に動員された。

今回の問題で解いたように、江戸時代初期の諸大名は、幕府からの動員に應えるために、藩内の支配体制を整える必要があった。普請役は、将軍が諸大名に対して強大な権力を示したのと同じ構図で、藩主が家臣に対する権力を明示することで主従関係を強化することにつながったのである。

しかし、普請役は藩財政に大きな負担となり、いくつかの悲劇をもたらした。

有名なのは、江戸時代中期に起きた宝暦治水事件であろう。幕府の命で薩摩藩が行った木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）の治水事業（宝暦治水）の過程で、幕府の激しい嫌がらせによって、工事中に薩摩藩士が 51 名抗議の自害、33 名が病死し、工事完了後に薩摩藩の総指揮者であった家老平田靱負も自害した。この事件を扱った書籍が複数出版されている。

一方で意外に知られていないのが、島原の乱である。「島原の乱＝キリシタンの反乱（宗教戦争）」という見方が定着しているが、そもそもの原因は、領主の百姓に対する酷使や過重な年貢負担であり、その背景には、幕府の歓心を買うために、分不相応な御手伝普請を引き受けたことがあった。はっきり言って暴君による失政の結果であったが、島原藩主松倉勝家は失政を認めず、反乱をキリシタンの暴動と主張し、幕府もこの乱をキリシタン弾圧の口実に利用した。しかし『細川家記』（熊本藩細川氏の家史）など同時代の記録には、「反乱の原因は年貢の取りすぎ」と明記されている。幕府も本当は原因を正しく理解しており、乱後、松倉勝家は、過酷な年貢の取り立てが一揆を招いたとして改易処分となり、後に斬首となった。

なお、江戸時代、大名が死罪を申しつけられた例は、赤穂事件（忠臣蔵の件）などいくつかあるが、藩主が切腹ではなく斬首とされたのは、この 1 件のみである。

まとめ

大名御手伝普請は、諸藩にとって参勤交代と並ぶ大きな財政負担となった。しかし、幕藩体制成立期には、藩主にとってデメリットばかりではなく、家臣との主従関係の強化に役だったことも確かである。

それに加えて、普請に使われた技術が転用されて新田開発が進むとともに、陸・水の交通が整備されて流通機構が発達し、時代劇に見られるような、江戸時代の経済発展をもたらす要因ともなった。

このことは、

ことを私たちに示唆してくれる。